

「勇氣」の意味

中野伸彦

The Meaning of "Yuuki"

NAKANANO Nobuhiko

(Received September 25, 2020)

一 はじめに

芥川龍之介の「羅生門」(大正四年)には、次のように「勇氣」という語が用いられている。¹⁾

1 どうにもならない事を、どうにかする為には、手段を選んでゐる違はない。選んであれば、築土の下か、道ばたの土の上で、餓死をするばかりである。さうして、この門の上へ持つて来て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける為に、当然、その後に来る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。(『芥川龍之介全集』第一巻〈岩波書店〉147頁)

2 下人は、太刀を鞘におさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面砲を気にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて来た。それは、さつき、門の下で、この男には欠けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反対な方向に動かうと

する勇氣である。(前に同じ、153頁)

この「勇氣」については、1について言えば、「作者は〈勇氣〉という言葉を使っているが、行為をためらわせる禁忌の感覚がなんに根ざしているかは自明であろう。人間としての最後の倫理といつてもいいし、超越的なモラルといかえてもよい。」(三好行雄(一九九三)、49頁)、「下人は「餓死をするか盗人になるか」と何度も考え、盗人になるしかないとの結論に到りつきながらも、その「勇氣」が出ずにいた。」(田中実(一九七八)、29～30頁)のやうに、禁忌を犯して盗人になるふんざりをつける心、2の「この老婆を捕へた時の勇氣」について言えば、「死んだ女から髪を抜き取っている老婆の無法に懲罰を加えようとする「勇氣」」(前田愛(一九八八)、191頁)、「恐怖に萎縮していた下人の身と心は、相手を人間と認知する過程で、合理的判断を抜きにした〈許す可らざる悪〉を憎悪し、阻止する〈勇氣〉」(さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣)へと自身を解放したのだ」(杉本優(一九八九)、30～31頁)のやうに、老婆の悪事に立ち向かう心というやうな心の在り方を表すものとして解釈されているようである。現代語の「勇氣」は、大まかに言えば、「何かを恐れない気持ち」であり(『女の人が一人で牛井屋に入るには勇氣がいるでしょう?』(木原音瀬『美しいこと』〈講談社文庫〉58頁)、「現代語の「勇氣」の意味するところに基づいて考えれば、今述べたやうな解釈(禁忌を犯すことを恐れない気持ち・老婆の悪事に立ち向かう

ことを恐れない気持ち)になるのであるろうと思われる。しかし、近代における「勇氣」は、現代語とは、いささか異なった意味を持つていたと考えられる。以下、近代の「勇氣」の用例をもとに、「羅生門」の「勇氣」には、別な解釈もありうるのではないかということを書いていきたい。

二 「勇氣」

近代における「勇氣」の用例を見ると、現代語と同様に、「何かを恐れない気持ち」という意味でとらえることができるものも見られる。

3 何うかして旨いものが出来るやうにと念じてゐる。けれどもたゞ念力丈では作物の出来栄を左右する訳には何うしたつて行きつこない、いくら佳いものをも思つても、思ふやうになるかならないか自分にさへ予言の出来かねるのが述作の常であるから、今度こそは長い間休んだ埋合せをする積であると公言する勇氣が出ない。そこに一種の苦痛が潜んでるのである。

(夏目漱石「彼岸過迄について」へ『漱石全集』第十六卷(岩波書店) 488頁、明治四十五年)

4 「嬉しゅうございます。あなたのような美しいかたに、あのご立派な奥様をさしおいて、それほど思つていただくとは、私はまあ、何という果報者でしょう。嬉しゅうございますわ」

そして、極度に鋭敏になつた私の耳は、女が門野の膝にでももたれたらしいけいはいを感じるのでございます。それから何かいまわしい衣ずれの音や、口づけの音までも。

まあ御想像なすってくださいませ。私のその時の心持がどのようでございますましたか。もし今の年でしたら、なんのかまうことがあるものですか、いきなり戸を叩き破つてでも、二人のそばへ駆けこんで、恨みつらみのありつたけを、並べもしたでしようけれど、何を申すにも、まだ小娘の當時では、とてもそのような勇氣が出るものではございません。込み上げて来る悲しさを、袂の端でじつと抑えて、おろおろと、その場を立去りもせず、死ぬる思いをつづけたことでございます。(江戸川乱歩「一人でなしの恋」へ『江戸川乱歩全集』第二卷(講談社) 300頁、大正十五年)

5 傘を傾けているのが暗いなかにもはつきりと見えたので、私は実際に形の単衣を着ているのが暗いなかにもはつきりと見えたので、私は実際にぎよつとした。右にも左にも灯のひかりの無い堀端で、女の着物の染め模様などが判らう筈がない。幽霊か妖怪か、いずれ唯者ではあるまいと私は

思った。暗い中で姿の見えるものは妖怪であるという古来の伝説が、わたしを強くおびやかしたのである。

まさかきに、や、つと叫んで逃げる程でもなかったが、わたしは再び振り返る勇氣もなく、ただ真つ直ぐに足を早めてゆくと、女もわたしを追うように付いて来る。(岡本綺堂「御堀端三題」へ『綺堂むかし語り』(光文社文庫) 51頁、昭和十年)

しかし、一方で、次のように、現代語のように解しがたい「勇氣」の用例もある。たとえば、次は、夏目漱石の「永日小品」の中の「火鉢」という題の文章に用いられた例であるが、寒いうえに、まだ小さな我が子がさかんに泣き、「朝から心持が好くない」中で、「とても仕事をする勇氣が出ない」と言っている。これは、「何かを恐れない気持ち」というわけではなく、仕事に向かう元氣・氣力のことを指していると考えられる。

6 風呂場は水でかち／＼光つてゐる。水道は凍り着いて、栓が利かない。漸くの事で温水摩擦を済まして、茶の間で紅茶を茶碗に移してゐると、二つになる男の子が例の通り泣き出した。この子は一昨日も一日泣いてゐた。昨日も泣き続けに泣いた。妻にどうかしたのかと聞くと、どうも泣いたのぢやない、寒いからだと云ふ。仕方がない。成程泣き方がぐ／＼で痛くも苦しくもない様である。けれども泣く位だから、どこか不安な所があるのだらう。聞いてゐると、仕舞には此方が不安になつて来る。時によると小悪らしくなる。大きな声で叱り付け度い事もあるが、何しろ、叱るには余り小さ過ぎると思つて、つい我慢をする。一昨日も昨日も左うであつたが、今日も亦一日左うなのかと思ふと、朝から心持が好くない。胃が悪いので此の頃は朝飯を食はぬ掟にしてあるから、紅茶茶碗を持った儘、書齋に退いた。

火鉢に手を翳して、少し暖たまつてゐると、小供は向ふの方でまだ泣いてゐる。其のうち掌丈は煙が出る程熱くなつた。けれども、脊中から肩へ掛けては無暗に寒い。殊に足の先は冷え切つて痛い位である。だから仕方なしに凝としてゐた。少しでも手を動かすと、手が何処か冷たい所に触れる。それが刺にでも触つた程神経に伝へる。首をぐるりと回してさへ、頸の附根が着物の襟にひやりと滑るのが堪へ難い感じである。自分は寒さの圧迫を四方から受けて、十畳の書齋の真中に疎んでゐた。此の書齋は板の間である。椅子を用ひべき所を、絨氈を敷いて、普通の畳の如くに想像して坐つてゐる。所が敷物が狭いので、四方とも二尺がたは、つるつるした

板の間が剥き出しに光つてゐる。凝として此の板の間を眺めて、竦んでゐると、男の子がまだ泣いてゐる。とても仕事をやる勇氣が出ない。(夏目漱石「永日小品」へ『漱石全集』第十二卷(岩波書店)へ148頁、明治四十二年)

次も、「永日小品」の「元日」と題する文章の中の例であるが、漱石の謡が虚子よりも下手だということ、年始にやってきた「若い男」たちに指摘され、漱石自身も、その通りだと認めている場面である。「馬鹿を云へといふ勇氣も出なかつた」というのは、「馬鹿を云へ」と言い返すことを恐れて、そう言わないというわけではなく、自分が下手なことは歴然としていて、「若い男」たちの批評に反発する気にもならないという事であろうと考えられる。

7 雑煮を食つて、書齋に引き取ると、しばらくして三四人来た。いづれも若い男である。其内の一人がフロックを着てゐる。着なれない所為か、メルトンに対して妙に遠慮する傾きがある。あとのものは皆和服で、かつ不断着の儘だから頓と正月らしくない。此連中がフロックを眺めて、やあーやあーとツづゝ云つた。みんな驚いた証拠である。自分も一番あとで、やあと云つた。

フロックは白い手巾を出して、用もない顔を拭いた。さうして、頻に屠蘇を飲んだ。ほかの連中も大いに膳のものを突ついてゐる。所へ虚子が車で来た。是は黒い羽織に黒い紋付を着て、極めて旧式に極つてゐる。あなたは黒紋付を持つてゐますが、矢張能をやるから其必要があるんでせうと聞いたたら、虚子が、えゝ左うですと答へた。さうして、一つ謡ひませんかと云ひ出した。自分は謡つても宜う御座んすと応じた。

それから二人して東北と云ふものを謡つた。余程以前に習つた丈で、殆ど復習と云ふ事をやらないから、所々甚だ曖昧である。其上、我ながら覚えぬ声が出た。漸く謡つて仕舞ふと、聞いてゐた若い連中が、申し合せた様に自分を不味いと云ひ出した。中にもフロックは、あなたの声はひよろ／＼してゐると云つた。此連中は元來謡のうの字も心得ないもの共である。だから虚子と自分の優劣はとも分らないだらうと思つてゐた。然し、批評をされて見ると、素人でも理の当然な所だから已を得ない。馬鹿を云へといふ勇氣も出なかつた。(夏目漱石「永日小品」へ『漱石全集』第十二卷(岩波書店)132頁、明治四十二年)

このように、「勇氣」は、必ずしも、「何かを恐れない気持ち」に限らず、広く、「何かをする氣力」というような意味で使われていたと考えられるので

ある。次の、8、10の例は、疲れているはずなのに、何かをする氣力が出る。氣力を出すという意味で、「勇氣が出る」「勇氣をふるひ起こした」を用いている。(10の例は、海で溺れかけているマキ子を必死に助けようとしている場面である。助けようと海に入った「恋人」と呼ばれている人物は、「瘡せさらばへた初老」(151頁)の老人である。現代語的な意味の「勇氣」で解釈することもできなくはないかもしれないが、「氣力をふり絞つて」というようにとらえる方が適切なように思われる)

8 私達は疲れて居た。

停車場に来ると、いきなり腰掛の上に長く身を横へた。酒か女かでなければ、元氣を恢復することが出来ないほど、私達はつかれてゐた。

『烟草を買ひに行きたいが、向ふ側に行くのが大変だ。』友もこんなことを言つてゐた。黄い顔を電灯は青く照した。

『でも、女といふものは盛んなものだね、こんなに疲れてゐても、それつて言へば、勇氣が出るからね。生返つたやうになるからね、えらい力を持つたものさ!』

『それぢや一つ生返るかね。』

笑ひながらこんなことを友は言つた。(田山花袋「百日紅」へ『定本花袋全集』第二十二卷(臨川書店)へ592頁、大正元年)

9 「なにか旨い物が食いたいなあ。」

そんな贅言を云つてゐるのは、駐屯無事の時、ひとたび戦闘が開始すると、飯どころの騒ぎでなく、時には唐蜀黍を焼いて食つたり、時には生玉子二個で一日の命を繋いだこともありました。沙河会戦中には、農家へはいって一椀の水を買ったきりで、朝から晩まで飲まず食わずの日もありました。不眠不休の上に飲まず食わずで、よくも達者に駆け廻られたものだと思いますが、非常の場合にはおのずから非常の勇氣が出るものです。(岡本綺堂「昔の従軍記者」へ『綺堂むかし語り』(光文社文庫)へ121頁、昭和十二年)

10 越智氏が、金切声を上げた。

「マキちゃん、水の上へ頭を出した。……大丈夫! まだ生きてる!」

やうやく、この時になつて岬の鼻から漁船が漕ぎ出して来た。しかし、漁船と二人の間は十四五町もへだたつてゐる。

「恋人」は、マキ子を水の上へ押しあげながらいつしんに泳いでゐるが、もう力がつきはてたらしく、時々波のしたへ、がぶつと沈んでしまふ。

望遠鏡を持つてキヤラコさんのうしろに立つてゐた山田氏が、身もだえしながら叫んだ。

「いま船が行かなければ、沈んでしまふ」

漁船は、見るも歯痒いやうな船足でのろろと近づいてゆく。

恋人の姿は、やゝ長い間海面の下に沈み込んでゐたが、最後の勇氣をふるひ起こしたのだらう、マキ子を抱へながら漁船へ向つて泳ぎ出した。

見るさへ苦痛な十分間だった。……しかし、漁船はたうとう「恋人」の傍まで漕ぎ寄つた。(久生十蘭「キヤラ子さん」へ「定本久生十蘭全集」

2 (国書刊行会) 152頁、昭和十四年)

次は、疲れているわけではないが、若いころはできた甕に入つての「野天風呂」が、今ではできなくなつてゐることを「野天風呂で鼻唄をうたつてゐる勇氣はない」と言つてゐるのであるが、「野天風呂」を恐れる氣持ちが生じてゐるといふよりは、そんなことをする氣力(若さ)はもうないという事であると思われる。

11 わたしは日露戦争の当時、満洲で野天風呂を浴びたことを思い出した。

海城、遼陽その他の城内にシナ人の湯屋があるが、城から遠い村落に湯屋というものはない。幸いに大抵の民家には大きい甕が一つ二つは据えてあるので、その甕を畑のなかへ持ち出して、高粱を焚いて湯を沸かした。満洲の空は高い、月は鏡のように澄んでゐる。畑には西瓜や唐茄子が蔓を這わせて転がっている。そのなかで甕から首を出して鼻唄を歌つてゐると、まるで狐に化かされたやうな形であるが、それも陣中の一興として、その愉快は今でも忘れない。甕は焼き物であるから、湯があまりに沸き過ぎた時、うかつにその縁などに手足を触れると、火傷をしそふな熱さと思はず飛びあがることもあつた。

しかしそれは二十年のむかしである。今のわたしは野天風呂で鼻唄をうたつてゐる勇氣はない。行水も思つたほどに風流でない。狭くても窮屈でも、やはり据風呂を買おうかと思つてゐる。(岡本綺堂「風呂を買うまで」へ「綺堂むかし語り」(光文社文庫) 267頁、大正十三年)

12 15は、心が沈むやうな出来事にあつて心が沈んでゐる人について「勇氣を出して」、あるいは、「勇氣が出る」と言つたり(12・13)、心が沈むやうな出来事にあつても心のつらさに負けずにいられる心のあり方を「勇氣」と言つたり(14・15)してゐる例である。これらも、「何かを恐れない氣持ち」といふより、心が沈むやうな出来事にあつてもくじけない氣持、生きる氣力と

いふやうなものを「勇氣」と言つてゐると考えられる。(12は、かつての恋人との間に生まれた子供がゐることを、夫をはじめ、周囲には秘密にしていた「フォヴェル夫人」が、その秘密を周囲の人たちに氣づかれたのではないかと思つて、「溜息をつ」くのに対し、自分は「フォヴェル夫人」の味方であり、不安に思ふ必要はないと、姪の「マドレーヌ」が励ます場面、13は、「梓」が、自分の恋人が、自分といればつらさを忘れて元氣が出ると言つてくれたことを、自分の母親に話す場面、14は、13の続きだが、恋人との結婚に支障が生じ姿を消した「梓」を仲間たちが案じるが、仲間の一人が、「梓」は自殺したりはしないと信用するべきであると言う場面、15は、「二流どころの画家である」(354頁)夫「トム」とは別に、長く愛し合つてゐた男性「ジェラード」が急死したことを知つても、氣丈に振舞う女性に感心する場面、の例である。)

12 夫人は鏡面に向つてつくづく自分の顔に見入つた。四ヶ月間の心配苦勞でかうも老けてしまつたのか？ これが以前の生々と幸福に輝いてゐた自分の顔であつたのか？

「お判りになりました？ ですから、わたしは何うしても結婚しなければなりません。それですべての解決がつくのですもの……それにしても、伯母さまがこんなにお交りになつたことを、伯父さまは何うしてお氣が附かないのでせう。不思議ね。だけどわたしは先頃から勤付いてゐました。只ならぬ秘密があなたにちがひないつていふことを。」

夫人は深い溜息をついた。マドレーヌが勤づくくらゐなら、他の人達も氣づいたにちがひないとおもつた。

「あゝ、これで、私の名譽も廃つてしまひました。」

「そんなことはないわ、伯母さま。勇氣を出して下さい。わたしも今日からは伯母さまの味方ですわ。」(ガボリオ「田中早苗訳」「書類百十三」へ「世界探偵小説全集」第三卷(博文館) 215頁、昭和四年)

13 「さう、あなたはもう子供ぢやないのね。……そんなら、どんなふうにな、その方が好きになつたか、ママに話せるわね」

梓さんは、まるで暗記でもするやうな、抑揚のない調子でいひだした。「えゝ、話せます。……その方はね、画の勉強をして、長い間たいへん奮闘したひとなの。いろんな辛い目に逢つても、絶望せず一所懸命にやり通したのよ。……そんな話をしてゐると、あまり悲しいことばかりで、その方は泣き出してあとをつゞけることが出来なくなるの。そして、その氣

持をいろいろなたとへをひいてあたしに説明してください。あたし、そのお話をきいてみると、なんとも言へないほど気が沈んできて、急におとなになったやうな気がするんです」

「それで、あなたのほうでは、どんなお話をするの」

「あたし、まだ子供だから、あなたを慰めてあげることができませんね、つて」

「すると、その方は、どうおっしゃるの？」

「いゝえ、あなたは、どんな大人よりもつと大人ですつて、おつしやるの。聡明でもなく、心も優しくないひとは、いくつになつても子供とおなじなのですから、つて。……だから、あなたがかうして私の傍にゐてくださいだけで、ずいぶん元気が出るんです。ずつとずつと長く傍にゐてくださいつたら、もつともつと勇氣が出るでせう、つて。……だから、あたし、その方と結婚することにしたの」(久生十蘭「キヤラ子さん」へ「定本久生十蘭全集」2(国書刊行会) 169頁、昭和十四年)

14 「梓さんは、死にゝなんか行つたんぢやない。少くとも、さう考へるべきだわ。ボクたちは、そんな弱虫ぢやないんだ」

芳衛さんが、泣きやんだ。

「さうね。……せめて、そんなふうに希望を持たなければ、とても、やり切れないわ」

ピロちゃんが、やつつけるやうな口調でいふ。

「希望ぢやない、真実さ。……あたしたちは、お互ひの勇氣を、もつと信用し合わなくてはいけないな」

「だから、いゝ教訓だと言つたわ」

「ほらね、ちゃんと知つてるぢやないか。……泣くことも、恐がることも要らないんだ。だまつて信じてればいゝんだよ、梓さんの理性を」

ユキ坊が、とつぜん横合ひからひつたつた。

「あたしたち、いくども誓ひ合つたわね。いろんな場合に理性でやつてのけよう、つて。……自分たちの時代のためにも、もつと、しつかりする義務があるつて。……梓さんだつて、たぶん、それを忘れぢやあないよ。決して、馬鹿げたことはしない。あたし信じてる！」(前に同じ、176頁)

15 「幸い、早く終わりそうですから、おうちに帰るんですな」

「うちになんか帰りたくありませんわ。独りぼつちになりたくありませんの。泣いたりすれば、眼が赤く、はれぼつたくなるので、泣くわけにもい

きません。それに、あしたはたくさんの人たちとお昼ご飯を一緒にいただくことになっていきますのでね。それはそうと、あなたも、おいでになっていただけませんか？ もう一人、男のひとがよぶんに必要なんです。あたしは元気な様子をしていなければなりませんし、トムは、この会がうまくゆけば、肖像画を一枚たのまれるだろうと、当てにしているんですよ」

「驚きましたね、あなたの勇氣には——」

「そうお思いになって？ 内心は断腸の思いなんですけど。でも、こんなふうにしておいたほうが気が楽だと思えますの。ジェラードだつて、あたしが平気な顔をしているほうが気に入るんじゃないでしょうか。心の悲しみを包みかくして陽気に振舞わなければならぬ今のあたしの境遇が持つ皮肉を、あのひとだつたら、きつと面白がるにちがいませぬわ。フランスの小説家がとて上手に描写するのは、こういう種類のことだとあのひとはいつも思っていたんですからね」(サマセット・モーム「龍口直太郎訳」「社交意識」へ「コスモポリタンズ」(ちくま文庫) 361頁、昭和三十七年)

現代語の「勇氣」も、「何かをする気力」のうちに含まれるであろうが、それも含めて、近代の「勇氣」は、「何かをする気力」のことを、広く指していたと考えられる。このことを踏まえると、「羅生門」の「勇氣」も、心が沈むような事態の中にあつて、後ろ向きになつて、生きる気力を失っている状態が、例1の「勇氣が出ずにゐた」であり(例2の「さつき、門の下で、この男に欠けてゐた勇氣」も、同様)、老婆の話を受けて、生きることに立ち向かおうとする前向きな姿勢・気力を取り戻したことが、例2の「下人の心には、或勇氣が生まれて來た。」・「全然、反対な方向に動かうとする勇氣」であるとも考えられると思うのである。また、例2の「さつき、門の下でこの老婆を捕へた時の勇氣」も、「悪を悪む心」が「勢よく燃え上り出」(150頁)すという意味で、下人の気持ち前向きになり、気力を取り戻したことを指していると考えられる。

三 「Sentimentalism」の影響(2)

本稿の趣旨は、今述べた通りであるが、関連して、「だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模様も少から

ず、この平安朝の下人のSentimentalismに影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。」(146頁)とある。『Sentimentalismに影響した』の解釈について、触れておく。

これについては、「下人は今日の雨模様ですらセンチメンタルになる男だと語られていた」(田中実(一九七八)、31頁)、「空模様は少からずこの平安朝の下人のSentimentalismに影響した。」という認識によれば、彼の心理は生存苦というよりもむしろ失業者としてのサンチマンタリズムに陥っていたのである」(笹淵友一(一九八二)、207頁)、「『羅生門』は、下人が『Sentimentalism』を放擲し、モノを相手とする行為を拒絶して『積極的』に『強盗』を選び取る物語である」(須田千里(一九九四)、13頁)のように、下人が『Sentimentalism』に陥っていると解されているようであるが、逆の解釈もありうるのではないかという点である。

現代語で考えると、「影響した」は、

16 Kの復籍したのは一年生の時でした。それから二年生の中頃になる迄、約一年半の間、彼は独力で己れを支えて行つたのです。ところがこの過度の労力が次第に彼の健康と精神の上に影響して来たように見え出しました。それには無論養家を出る出来ないの蒼蠅い問題も手伝つてゐたでせう。彼は段々感傷的になつて来たのです。時によると、自分丈が世の中の不幸を一人で脊負つて立つてゐるような事を云ひます。さうして夫を打ち消せばすぐ激するのです。それから自分の未来に横わる光明が、次第に彼の眼を遠退いて行くやうにも思つて、いら／＼するのです。(夏目漱石「心」)

のように、悪い方向に導かれる場合、

17 余が現在の頭を支配し余が将来の仕事に影響するものは残念ながら、わが祖先のもたらした過去でなくつて、却て異人種の海に向ふから持つて来てくれた思想である。(夏目漱石「東洋美術図譜」へ『漱石全集』第十六

巻(岩波書店) 307頁、明治四十三年)

のように、よいでも悪いでもない、中立的なある方向に導かれる場合には用いられるが、「その日の天候が影響して、よい記録を出すことができた」とか「好景気が影響して、会社の業績は好転した」のように、よい方向へ導かれる場合には用いにくいように思われる。

しかし、かつては、次のように、よい方向へ導かれる場合に用いられた例もある。

18 「奥さんの此態度が自然私の気分に影響して来ました。しばらくするうちに、私の眼はもと程きよろ付かなくなりました。自分の心が自分の坐つてゐる所に、ちやんと落付いてゐるやうな気にもなれました。要するに奥さん始め家のものが、僻んだ私の眼や疑ひ深い私の様子に、てんから取り合はなかつたのが、私に大きな幸福を与へたのでせう。私の神経は相手から照り返して来る反射のないために段々静まりました。(夏目漱石「心」)

へ『漱石全集』第九巻(岩波書店) 184頁、大正三年)

「センチメンタリズムの破壊」として、次のような記述があり、

19 私はモウパッサンの作品を読んで、驚きもし嘆きもし憎みもした。かういふ状態が社会の状態であり人間の状態であるかと思ふと、慟哭したくなつた。『そんなことはない。そんなことはない。これも要するに作者の想像である。想像で見た作者の人生である』と強いて思つて、自から心の安慰を求めやうとした。けれどそれは矢張美しい夢であつた。真乎に虚偽を排して観察して見ると、モウパッサンの描いたところは一々争ふべからざる事実であつた。美しい衣をぬぎ捨てた赤裸々の自然であつた。(略)理想があればこそ、抵抗もしたくなる、鏡もつけて見たくなる。なまじいに美などといふことに執着するから、自然を自然として見ることが出来ない。理想を破壊しやう、美といふ觀念を破壊しやう。思ひ切つて行く処まで行つて見やう。かう私は思つた。(田山花袋『小説作法』へ『定本花袋全集』第二十六巻(臨川書店) 240頁、241頁、明治四十二年)

芥川龍之介の他の作品でも、

20 桜頃の或夜、お君さんはひとり机に向つて、殆一番鶏が啼く頃まで、桃色をしたレター・ペエピアにせつせとペンを走らせ続けた。が、その書き上げた手紙の一枚が、机の下に落ちてゐた事は、朝になつてカツプエへ出て行つた後も、遂にお君さんには気がつかかなかつたらしい。すると窓から流れこんだ春風が、その一枚のレター・ペエピアを翻して、鬱金木綿の蔽ひをかけた鏡が二つ並んでゐる梯子段の下まで吹き落してしまつた。下にゐる女髪結は、頻々としてお君さんの手に落ちる艶書のある事を心得てゐる。だからこの桃色をした紙も、恐らくはその一枚だらうと思つて、好奇心からわざわざ眼を通して見た。すると意外にもこれは、お君さんの手蹟らしい。ではお君さんが誰かの艶書に返事を認めたのかと思ふと、「武男さんに御別れなすつた時の事を考へると、私は涙で胸

が張り裂けるやうでございます」と書いてある。果然お君さんは殆徹夜をして、浪子夫人に与ふべき慰問の手紙を作ったのであった。――

おれはこの挿話を書きながら、お君さんのセンチメンタリズムに微笑を禁じ得ないのは事実である。が、おれの微笑の中には、寸毫も悪意は含まれてゐない。(芥川龍之介「葱」) (『芥川龍之介全集』第五卷(岩波書店) 238頁、大正九年)

21 少女は宣教師と入れ違ひに保吉の隣りへ腰をかけた。その又「ありがたう」も顔のやうに小ましやくれた抑揚に富んでゐる。保吉は思はず顔をしかめた。由来子供は――殊に少女は二千年前の今月今日、ベツレヘムに生まれた赤児のやうに清浄無垢のものと信じられてゐる。しかし彼の経験によれば、子供でも悪党のない訳ではない。それを悉く神聖がるのは世界に遍満したセンチメンタリズムである。(芥川龍之介「少年」) (『芥川龍之介全集』第十一卷(岩波書店) 55頁、大正十三年)

のような例があるところから見ると、「現実よりも虚構に没入してしまう」(小谷瑛輔(二〇一八)、15頁)というような意味の語であったと考えられる。一概に悪いことなわけではないが、「羅生門」においては、そこから脱却すべき対象として悪いように解釈され(海老井英次(一九九〇)では、「羅生門」の「Sentimentalism」への注として、「フランス語。「感傷」はこの作品世界の前提になっているムードであり、その超克が主人公の課題なのである」と記されている)、また、現代語の「影響した」の用法の影響もあって、下人が「Sentimentalisme」に陥っていると解されているように思うのであるが、「羅生門」の冒頭の下人は、「Sentimentalisme」から脱却している、あるいは、「Sentimentalisme」が減退していると考えられることでもできると思うのである。

最後の下人が、現実を本当に見ていないのでないかということについては、田中実(一九七八)で、「〈現実〉に出会えず、夜の闇に紛れ込でいった若い男、この「平安朝の下人」にとつて、楼上の体験は通過儀礼たりえず、〈境界〉は逃げ水のごとく遠ざかっていった。ここには、〈現実〉の上澄みだけを掬いとして観念の陥穽に落ち込んでいく青年の姿が描き出されていたのである」(36頁)、「下人が〈行為〉を獲得し、「夜の底」にかけ下りていくときの「解放」感、それこそ〈語り手〉の批評の対象であり、小説は決して主人公の主観が作品の空間の全てではない。〈語り手〉は下人が己の既成の観念によって〈世界〉の方を組み替えてしまう、その若々しい倨傲と錯誤を

語っていた。そのとき、下人に対峙すべき対象、「現実」あるいは〈世界〉は後方に退き、下人によって造り変えられた観念上の〈現実〉、欺罔の方が浮上してくる。下人はそれと知らずに欺罔の闇に包まれ、いっそう孤立化を深め、「孤独地獄」に陥っていくであろう。かくて〈現実〉と格闘はおろか、対峙することさえできず闇に包まれた男(考える青年)があらわになってくる」(38頁)と述べられている通りであるように思うのであるが、まさに、これは、「Sentimentalisme」にはかならない。

これと対照的に、冒頭の下人は、「Sentimentalisme」が失われ(減退し)、現実と直面してはなかつたのであろうか。とすれば、「羅生門」は、「Sentimentalisme」が失われ(減退)していたが故に、現実と直面し、生きる気力を失いかけていた下人が、「Sentimentalisme」を獲得する(あるいは、「Sentimentalisme」に陥る)ことによつて、生きる気力を得るようになる話と見ることもできるのではないかと思うのである(「黒洞々たる夜」(154頁)の闇を見ているのは老婆であつて、暗い階段を駆け下りる下人には、妙に明るい未来が見えてしまつてはいるのではないか)。このことは是非は措くとしても、「勇気」・「影響する」の近代における用い方を見ると、少なくとも、言葉の上からは、そういう解釈のできる可能性もあると思うのである。

四 おわりに

以上、「勇気」及び「影響する」の近代における用法には、現代とは異なるところがあり、それを踏まえて考えれば、「羅生門」という小説の解釈に、これまでとは異なる解釈(管見の範囲であるが)の可能性もあるのではないかということ述べてきた。

注

(1) 『芥川龍之介全集』は、一九九五―一九九八年に出版されたものによる。また、後出の『漱石全集』は、一九九三―一九九九年に出版されたものによる。なお、以下、用例の引用に際しては、振り仮名を省くなど、表記を変えたところがある。また、近代の「勇気」・「影響する」の用例の採取にあたっては、次を利用したところがある。

・ 青空文庫 <https://www.aozora.gr.jp/>

(2) 「勇気」・「影響する」をどのようにとらえているかははっきりしないが、清水康次(一九八〇)で、「下人の内に力はあった。しかし、そ

の力は倫理や論理によっては行為と結び付かないのであり、内なる力を行為に結び付ける「勇氣」が欠けていたのである」（3頁）、「羅生門」において、作者は、日常の生の世界が偽りに満ちた弱者の世界であり、裸の弱者（偽りを持たない弱者）にとっては「黒洞々たる夜」という風景を呈することを示していた。そして、そのような闇に対抗しよう力を、作者は、下人の行為において描き出したのである」（11～12頁）、「理性の点検の前に彼は彼の生活を肯定するものを見出すことができない。このような現実の生活を否定する力の強さと、肯定する力の欠如とが、「自己の生活」に生きられない、「腰がすゑられない」という意識、すなわち空虚の意識をもたらしているのである。（略）現状の生に對するこのような空虚の意識は翻れば本当の自己に支えられた生（「自己の生活」に生きること）への願望となる」（13～14頁、*中野注…ここで言われている「彼」は芥川龍之介のことであるが、こうした意識が「羅生門」に反映しているということが述べられている）、「しかし、下人の力は、所詮、本当の力を意味するものではなく、（略）自己解放の欲求が冷め、以前の問題意識において下人の力が直視されてくれば、また、「羅生門」以後の作品において「黒洞々たる夜」の暗さが明確化されてくれば、初出稿の末尾文、つまり作者の下人に対する信頼の表現が消去されるのは必然であると考えられるのである」（21頁）のように述べられているのは、本稿で可能性として示した解釈に近いものかとも思われる。

引用文献

- 海老井英次（一九九〇）『近代文学注釈叢書14 芥川龍之介I』（有精堂出版）
 小谷 瑛輔（二〇一八）「芥川龍之介における「Sentimentalism」」「サンティマンタリズム」、「センチメンタリズム」——「羅生門」「葱」から「少年」まで——（『芥川龍之介研究』第十二巻）
 笹淵 友一（一九八二）「芥川龍之介「羅生門」新釈」（『国文学論集』山梨英和短期大学創立五十周年記念号）
 清水 康次（一九八〇）「羅生門」試論（『女子大文学』国文篇第三十一号）
 杉本 優（一九八九）「下人が強盗になる物語——「羅生門」論——」（『日本近代文学』第四十一集）

- 須田 千里（一九九四）「羅生門で語られたこと」（奈良女子大学文学部 研究年報 第三十八号）
 田中 実（一九七八）「批評する（語り手）——「羅生門」——」（『国語と国文学』第七十一巻第三号）
 前田 愛（一九八八）『文学テキスト入門』（筑摩書房）
 三好 行雄（一九九三）『三好行雄著作集』第三巻（筑摩書房）（芥川龍之介論）（筑摩書房、一九七六）の再録）